
《500文字小説》 風が吹く時

十司 紗奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《500文字小説》風が吹く時

【Nコード】

N9042R

【作者名】

十司 紗奈

【あらすじ】

罌くまあらしを撃つと熊嵐くまあらしが吹く。獵師の祖父と、自分がかつて偶然出会った罌のことを思う「俺」の物語。

不意に風が鳴った。黒雲が一気に走り、雪が舞う。

「しとめたな」

父ちゃんが、ぼそりと呟いた。じいちゃんが山に入ると必ず風が吹く。外に出ると、肌を刺すような風が全身を貫いた。

去年の秋、俺は茸を採りに行って、大きな罨に遭遇した。昔、人が罨に襲われた話や、凄まじい力の強さ、大きさは寝物語として聞いていたが、本物を見たのは初めてだった。絶対的な恐怖と遭遇した時、人は逃げたり大声をあげたりしないのだ、という事をその時知った。俺は石のように固まったまま、一步も動くことができなかった。

罨は俺をじっと見つめたままだった。が、大きな背中を向けて、ゆっくりと山奥へと消えて行った。

緊張が解けた瞬間、俺はその場に座りこんだ。情けないほど身体が震えていた。それでも、ヤツの深く澄んだ目の色が脳裏に焼きついていて。己の力だけで過酷な状況の中を生き抜いているものの目。野生の生き物に共通する、強い光。

じいちゃんが仕留めた罨は、あの時のヤツに違いない。理由などないが、そう思った。

「罨嵐か……」

かつて山の神と崇められた罨。その罨を仕留めると山が哀しむかのように強い風が吹く。俺は空を見上げた。厚い雲が凄まじい勢いで流れていった。

（後書き）

人受けする話ではない、という自覚はありますが、私の子供の頃の好きな話の一つが「シートン動物記」でした。人と野生の生き物との、命とプライドをかけた駆け引きをドキドキしながら読んでいました。変な子供でした。

最近吉村昭氏の「くまあらし 羆嵐」を読んで、子供の頃のオマージュとして書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042r/>

《500文字小説》風が吹く時

2011年10月8日19時22分発行